

第十八章 戦車コバルト・カウ

コバルト色のスーパーアイアンの壁に囲まれたマリンポリン製鉄所にソシア軍が総攻撃を仕掛けるがすべて跳ね返される。もちろんスーパーアイアンが途切れている箇所もある。それは鉄路だ。現に長い列車の後部が壁からはみ出ている。当然そこを狙ってソシア軍が攻撃するが鉄路はシールドされているからやはりビクともしない。

錆びた鉄を積載する無蓋車はいつの間にかコバルト色に変わって屋根もついている。さすがに窓はないが雨風は防げる。どこで方向転換をしたのか蒸気機関車が戻ってくる。そして最後尾の車両に連結される。各車両の前後のドアから次々とマリンポリンの市民が乗り込む。

「慌てずに。子どもと女が優先だ。男は手伝ってやれ。兵士は周りの警戒を怠るな」

しかし、攻撃しても無意味だと分かったのかソシア軍の攻撃が止まる。スーパーアイアンがマリンポリン製鉄所を完璧に守っている。ソシア軍の戦車や大砲の砲弾もミサイルもまったく効き目がなかった。

一両に百人ほど収容できるとすると数万人ほど乗車できる。この脱出がうまくいったら歴史に残る快挙になるだろう。

数百もの車両を牽引するコバルト色の蒸気機関車の大車輪を空転する。すぐさま空転が止ま

り線路を掴むようにゆっくりと回転し始める。全車両間の連結器が次々と音を立てて伸びる。「ガクン、ガクン、ガクン……」

動き出すと何事もなかったようにレールとレールのつなぎ目を通過する車輪の音が規則正しく聞こえる。ポイントに差し掛かると規則性が崩れて複雑な音を立てる。そして蒸気機関車の蒸気を吐く音と汽笛が響き渡る。

ようやくソシア軍の重爆撃機が上空に到着する。すぐさま一トン爆弾を投下する。その数は百発に上る。耳をつんざく大きな爆発音が響き渡ると見る間に製鉄所が黒煙で包まれる。

「透視映像に変更」

榊が宇宙戦艦の中央コンピュータに指示する。すぐさま製鉄所や蒸気機関車の鮮明な映像に変わる。製鉄所はコバルト色のスパーアイアの壁に守られていて、蒸気機関車は何事もなかったように線路を進む。

「すごい！」

イリが感動して涙ぐむ。

「あれを見る！」

加藤が叫ぶ。コバルト・カウの砲塔にある牛の角を連想させる短い砲身が上空に向けられる。そして二本の砲身がグングン伸びて何とソシア軍の重爆撃機を串刺しにする。長い角、いや砲身は一旦消滅するが再び砲塔から伸びて同じように次の重爆撃機を串刺しにする。砲身が伸び

るように見えるのは特殊なレーザー光線なのかも知れない。

「何という攻撃だ。強引というか、不器用すぎる」

すぐさまイリが反応する。

「不器用！ やっぱりノロが造った戦車だわ」

榊も加藤も複雑な表情で納得しかける。

「ノロが造ったという見解に賛成するが、どうやってここまで運んだ？」

「地球に来たのはこの宇宙戦艦だけだ」

イリがマイクを持つ。

「青い牛型の戦車の隊長！ 私はイリ。返事をしなさい」

しかし、コバルト・カウは重爆撃機を串刺しにするのに専念する。やっとなすべての重爆撃機が破壊されると宇宙戦艦の艦橋天井のスピーカーから音声がかえってくる。

「モウ、モウ」

*

陥落寸前のマリンポリン製鉄所から十万人ものウクライナー人が脱出した。ノロが一枚かんでいることに間違いはないとイリは確信する。加藤がイリの気持ちを察したのか言葉にする。

「やはりウィルス族の仕業としか言いようがない」

一時的とは言えイリもグレーデッドの総統だったからグレーデッドの実力はよく分かっている

る。

「ウイルス族がグレーデッドだと言うことが分かった。それにグレーデッドの母体は中華清国で世界大戦が起こらないように潜伏していた科学者たちの集団だと言うことも承知しているわ。いつの間にか平和主義から力には力という方針転換して逆に世界制覇を目指す乱暴な総統が現れて世界中が大混乱に陥ったときノロがサブマリン八〇八で総統を倒した……」

イリが歴史をひもとくような独り言を並べる。そして締めくくろうとする。

「……再びウイルス族という形で表舞台に現れてレッド・エレファントやコバルト・カウといった突拍子もない戦車でウクライナー共和国を助けようとしているのなら、ウイルス族にはノロのような人物が何人かいても不思議じゃないわね」

「ノロは一応日本人と言うことになっている」

榊が言葉を挟む。

「グレーデッドのメンバーの国籍は多様だ。というより祖国や母国のためではなく地球のためにという旗の下に集まっている」

加藤が追加する。

「そうするとノロのような人物が複数いてもおかしくないし、ノロの惑星に行かずに地球に残るとい道を選ぶ者がいても不思議ではない」

榊が加藤を支持するとイリがため息をつく。

「ノロ一人でも大変なのにノロみたいな人間があちこちでウロウロしてるなんて大問題だわ」
榊が表情を緩める。

「イリもたくさんいればいいだけじゃないか」

加藤がハッキリと笑う。しかし、イリは加藤の誘いに乗らずに目を固く閉じる。

*

「なぜコバルト・カウもレッド・エレファントも一両だけなの。大量に投入すればソシア軍なんて簡単に全滅できるのに」

榊がすぐ押さえる。

「コバルト・カウもレッド・エレファントも要らない。宇宙戦艦一隻あれば十分……」

加藤もすぐ割り込む。

「宇宙戦闘機ハヤブサ一機でも十分では？ いずれにしても自重した」

まだ目を固く閉じたままのイリの唇は再び閉じる。力尽くで地球の問題を解決するのは簡単だがそれでは自分が独裁者になってしまう。ノロは一言も言わなかったが、独裁はイリにも共通の不文律となっていた。ノロは地球に向かつて無意味だと考えたが、イリは少なくとも宇宙戦艦を移動手段として使った。

「イリはなぜ時空間移動装置で地球に移動しなかったのですか」

加藤の質問がイリの瞳をこじ開ける。

「場合によっては宇宙戦艦の主砲が必要になるかと思ったの」
イリの正直な答えに加藤は追加の質問を止める。すると榊が少し意地悪そうな笑顔を浮かべて尋ねる。

「最近ノロと連絡を取ったのはいつ？ アイツは今何をしてるんだ？」

動じることなくイリは見事な笑顔で返す。

「別居中よ」

そう言うってからイリは大きなため息をつく。

「地球に来る必要はなかった」

加藤が頷くと榊の顔から意地悪な表情を支えていた筋が消える。

「第二の地球を探すために地球を出たから当然のこと。そして第二の地球を見つけた以上当然の帰結だ」

イリは榊にしっかりと頷く。